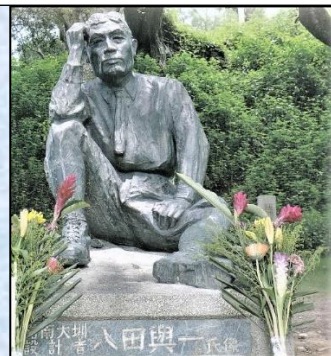


嘉南大圳の父「八田與一」

「4月、職場旅行で台湾の烏山頭ダムの八田與一の銅像を訪問する予定。ついては、きちんと勉強してから行きたいので3月に講話を。」とのご依頼をいただきました。とても嬉しいお話なので学習のおさらいをしてみました。

石川県河北郡花園村（現在の金沢市）出身。1910（明治43）年、東京帝国大学工科大学土木工学科を卒業後、台湾総督府内務局土木課技手として就職。浜野弥四郎に仕え、嘉義・台南・高雄など各都市の上下水道の整備を担当。28歳で当時着工中だった桃園大圳の水利工事を一任され、これを成功させ高い評価を受けた。1917（大正6）年、31歳の時、故郷金沢の開業医で石川県議なども務めた米村吉太郎の長女外代樹（16歳）と結婚。1920（大正9）年、嘉南大圳工事着工。1922（大正11）年、烏山頭トンネル工事起工。1928（昭和3）年、烏山頭トンネル貫通式。1930（昭和5）年、烏山頭堰堤竣工及び嘉南大圳竣工式。1942（昭和17）年、アメリカ潜水艦の魚雷攻撃で大洋丸沈没。東シナ海にて死去。



【1886年～1942年】

【台湾の上下水道を整備したバルトン・浜野弥四郎、そして八田與一と続く師弟関係】



バルトンの来日直後の1887（明治20）年7月、内務省衛生局技師の後藤はバルトンを案内して、函館・青森・秋田・仙台の衛生調査に出かけている。バルトンは帝国大学で多くの人材を育て、「日本の上下水道の父」とも言われている。

日本の台湾領有後、内務省衛生局長となっていた後藤は、バルトンに台湾の衛生調査を依頼した。1896（明治29）年8月、バルトンは、

【バルトン】 【浜野弥四郎】 【八田與一】 台湾総督府衛生顧問技師となり、東大での教え子浜野弥四郎と共に台湾に渡った。バルトンは足掛け4年間に及ぶ衛生調査と水道計画を行った。バルトンは渡台の3年後にマラリアに罹患、日本に戻って治療に専念したものの43歳で死去した。浜野はバルトンの死後も台湾に残り、1919（大正8）年まで台湾総督府の衛生・土木・都市計画に従事した。台湾総督府に就職した八田は、2年に満たない期間ではあったが、台湾上水道の建設現場で浜野の下で働く機会を得た。浜野の最後の仕事が台南上水道の建設であった。台南上水道の水源は曾文溪である。浜野から指示を受けた八田の仕事はこの綿密な探索であった。八田は、台南上水道建設事業での調査力と行動力を買われ、浜野に次ぐ水利の専門家として嘱望される存在となった。民政長官の下村宏は八田を呼び、台湾のみならず東南アジア周辺地域の用水施設建設の現場を視察してくるよう命じた。この後、桃園埤圳建設。そして嘉南大圳建設につながっていくこととなる。

【3人の画像はいずれも wikipedia より】

【烏山頭ダム建設】

八田與一は嘉南平原を調査し、ダムを造りこの土地を豊かにさせようと考えた。15万 ha、1万6千 km もの長さの嘉南大圳と呼ばれる大工事になった。台湾の全耕作面積の1/6を占める。当時はまだ珍しい最新式の大型の機械を大量に使った。曾文溪という大きな川から烏山頭水庫へ水を引くためにトンネルを作った。大きな事故を乗り越え、10年の歳月をかけて作られたダムは、当時東洋一の大きさになった。完成を祝って八田與一の銅像は建てられたが、威厳のある銅像は拒否したため、よく工事現場を見ていた時の座り込んだ格好が採用された。

烏山頭ダム



【終戦後、與一の後を追った妻外代樹（とよき）】

八田は、フィリピンの綿作灌漑計画の指揮者として、1942（昭和17）年5月7日、日本郵船の「大洋丸」に乗船。翌日、米国潜水艦の魚雷攻撃を受け、撃沈、死亡した。妻外代樹は1945（昭和20）年4月、台北から烏山頭に疎開。8月31日、学徒動員されていた次男泰雄が烏山頭に帰って来た。外代樹は、その夜、寢床を起きだし、家紋のついた正装に着替えて白足袋を履き、モンペをつけ新しい草履を履いて家の玄関を出て、烏山頭ダムの放水口脇に草履を揃えて手をあわせ、身を投げた。外代樹は、八田の銅像の後ろに設えられた小さな御影石の墓の下で與一と一緒に眠っている。



【金沢ふるさと偉人館提供】